

積算部物語

— Cost Management Story —

第二部 戦略部門への道

第13回

加納恒也

(公社) 日本建築積算協会
特別顧問



今までのあらすじ

平成2(1990)年の人事異動で、4名の課長が積算部長代理に昇進した。天野は、福井副支店長の元で東京支店積算部を預かることになったが、永野積算の社長から一本の電話が。

(主な登場人物)

天野清志：(株)ウエダ東京支店積算部長

土岐義隆：(株)ウエダ東京支店長

宮塚竜生：(株)ウエダ東京支店副支店長(工事担当)

時長磯雄：日本建設積算協会会長、明輝大学教授

永野善勝：日本建設積算協会副会長、(株)永野積算社長

毛呂陽一郎：日本建設積算協会理事広報委員長、(株)中林組営業部長

淵神哲明：日本建設積算協会広報委員会顧問、芝浜工業大学教授

SCENE13

積算協会へ

【協会への誘い】

平成2(1990)年の暮れ、(株)永野積算の永野社長が天野を訪ねてきた。永野積算は、昭和52(1977)年に千葉営業所長の紹介で積算業務を初めて委託した相手で、営業窓口の菊田専務とはそれ以来の付き合いである。積算業界ではトップクラスの規模を誇り、積算部の技術ランクもA級である。日頃は顔を見せない永野社長がどのような用件で来社するか聞いてはいない。

「天野部長さんとは、夏のPM塾でお世話になって以来ですな。昇進されて大変お忙しいところお時間を割いていただき有り難うございます。」

「確かに、菊田さんとはよくお会いしますが、永野さんとは正月の挨拶かPM塾くらいですね。」

PM塾とは、天野が課長時代から積算事務所の経営者層を集めて開催しているプロジェクトマネジメントについての勉強会である。数量積算あるいは公共工事の定型化した値入れ業務から脱却し、コストを核とした建築プロジェクトのマネジメントを志向してほしいと、ウエダ社内の企画営業・企画設計・事業開発、海外CMなどの実務者に講師を依頼し、あるいは関連した文献などをネタに、ビールを片手に意見交換を行うという催しであった。天野が目指しているコストを中心とした新しい業務分野を展開するためのパートナーを育成する意図もあった。そのために、技術力の高い、言い換えれば有能な人材がいると考えられる積算事務所に参加を呼びかけていたのだ。次世代経営者候補の参加も多くみられたが、業界の重鎮とも言われる永野も数回参加していた。

「本題に入らせていただきますが、天野さんに積算協会関東支部の役員になっていただきたいとお願いに参りました。私は、積算協会の副会長をやっております、是非とも天野さんのお力をお借りしたいのです。」

「これは意外なお話で、びっくりしました。わざわざ永野さんがいらっしゃるからには、相当難しいお話ではないかとビックついていましたよ。」

「いやあ、電話で要件をお伝えしたのでは、即座に断られるのではないかと思います、切り出せませんでした。天野さんも積算協会の会員になっていただいていますので、協会について大まかにはご理解いただいていると思いますが、少し説明させていただいてよろしいでしょうか。」

天野も積算協会会員ではあったものの、毎月送られてくる会誌にはほとんど目を通さず、積算事務所の親睦団体程度の認識であった。入会した動機は、当初の建築積算士資格が会員を前提としており、会



社が会費を負担してくれたからであった。

永野の説明によると、昭和50(1975)年に創設された社団法人日本建設積算協会(英語略称はQSIJ)は、積算事務所に限らず設計事務所やゼネコンあるいは学識経験者など幅広い分野の個人が参加している団体だという。昨年度から、建設大臣認定の「建築積算資格者」認定制度が発足し(天野も早速資格を取得したのだが)、これを機に活動を活発化させたい。今までは、設計事務所やゼネコンの役員が少なかったが、役員構成を多様化したいと考えているとのことだ。

「実は、明輝大学の時長先生に会長をお願いして、先生から天野さんのお名前が出ました。」明輝大学の時長磯雄教授は、建築経済分野の泰斗として知られており、天野にとっては学生時代の恩師にあたる。また、アンパンで有名な大村屋の技術顧問を務め、ウエダが本社社屋の建設を請け負った時には発注者側のキーマンでもあった。仕事の関係もあり、天野が時長と会う機会も多かった。色々要因のある先生からの招聘であると告げられると選択肢も狭まる。

「永野さん、積算協会にお誘いいただき有り難うございます。了解しました。私も会員の割には、恥ずかしながら積算協会についてよく知らないのですが、出来ることがあれば協力いたします。よろしくお願いします。」

「ご承諾有り難うございます。来年の4月後半に関東支部の総会が開かれます。そこで役員に就任していただく予定です。詳しいことは改めて連絡いたしますのでよろしくお願いします。」

積算協会の活動と関東支部の組織について概略の説明を受けたが、当然十分理解できるわけもない。いずれにしても4月の総会を待つことにした。

【新支店長】

「昨年の大蔵省の土地関連融資規制や日銀の金融引き締めにより、株価は急激に下がり金利も大きく上昇の傾向にあります。湾岸戦争によって原油価格も高騰しています。我々のビジネス環境は大きく変わってきているのです。」……

「現在進行中の受注案件及び施工案件についても、

全ての内容を見直す必要があります。」……

「東京支店の業績がウエダの命運を決めます。皆さんには、時代の変化に対応した新しい行動を期待します。オッ、ちょうど時間になったな、これで終わらしましょう。」

新たに赴任した土岐支店長の訓話を終了した。“ちょうど持時間(40分)から1時間オーバー”のスピーチだった。営業出身で名古屋支店から東京へと転入した土岐義隆は、雨の中でお客さんに土下座して逆転受注したという逸話を持つ生粋の営業マンである。熱弁をふるうことでも有名で、40分の持ち時間を1時間オーバーし、時計を見て「オッ、ちょうど時間になったな」ということになったのだ。この件については、以降の会議予定がグチャグチャとなり、まさか支店長に文句を言うわけにもいかないので総務部長が一身に責めを負うことになった。まあ、「来年は40分を徹底するよう支店長にお願いします。」という決意表明に留まったのだが。

バブルの崩壊が顕在化した1991年の4月に恒例の東京支店管理職会議が開催された。総勢380名の管理職と協力会社組織の幹部が明治神宮参集殿に集合し、支店の経営方針を始め目標達成への具体的な方策について共有する場である。支店長交代は5年ぶりで、5年前の管理職会議では、広島支店から転入した久保田支店長が訓話の大部分をアインシュタインの相対性理論の説明に費やしたのだから、東京支店長はユニークな人材であることが任命要件なのかもしれない。

バブルの崩壊はさまざまな影響を及ぼした。まず、支店の業績が過去最高レベルに上昇した。バブル時に高額な工事費で受注した物件は、バブル崩壊により工事原価(元請・下請取引価格)が急速に低減したため、思わぬことに工事益が上昇の一途を辿った。わずか2年間の皮肉な現象であったが。その後、建



設投資の急速な縮減と共にゼネコンと下請企業は瞬く間に苦難の時代を迎え、再び建設冬の時代が続くこととなる。

「天野君、毎週積算予定表を提出してくれているが、どのように使えばよいのかね。」見積提出に先立つ値決め会議を終えて支店長会議室を退出しようとする天野を呼び止めた土岐支店長からの質問である。

「受注に向けた入札日程と値決めの予定をお知らせする目的で提出しています。従来から行っていましたので、支店長にもお出ししていました。」

「確かに参考にはなるのだが、あれを見ているだけでは具体的な受注戦略も見えないし、俺の出番もないよ。」

「入札間近の物件について営業からの説明はないのでしょうか。」

「ハハハ、営業は社内調整が大雑把だからな。営業会議以外は値決めの時に説明を受けるだけだよ。積算予定表をくれるからにはそれなりの説明があるかと期待して待っていたんだが。」

「支店長、気が利かなくて申し訳ありませんでした。毎週30分ほどお時間をいただければ内容説明に伺います。」

「火曜日の午前中は比較的時間が取れるから、秘書と調整してくれ。君の忌憚ない意見も聞きたいな。」

「かしこまりました。来週から説明に伺います。」支店長は営業出身だけに、受注戦略に厳しい視線を注ぐ。営業部門はやや腰が引けて、支店長と距離を置きたがるようだ。これ以降、天野は毎週支店長室に赴いて積算予定表の物件について、一般的な工事概要とともに、受注の可能性や戦略などの活動内容についてかなり踏み込んだ説明を行なった。天野の説明に対して、時には支店長から具体的な指示やコメントもあり、営業に対しての働きかけも見られるようになった。図らずも支店長と営業の情報共有が進むことになり、値決めも比較的スムーズに行われるようになった。“天野は支店長に何を告げ口しているのか?”と猜疑的な目で見られることもあったが、副支店長をはじめ大部分の営業マンとは信頼関

係を築いているため、リアクションは感じられなかった。

しかし、時として支店長は過酷なことを言う。

「道徳会館ビルの件だが。こんな家賃を払っては支店経営が成り立たない。せいぜい半値が今の相場だよ。至急、事業収支計画を見直し、設計内容の大幅変更も検討してくれ。」

道徳会館とは、ウエダ本社の隣に建っている日本道徳団体連合会所有のビルである。40年ほど前に建設され、ウエダがテナントとして入居している。天野が入社した時には、東京支店が入居していたが、現在は本社機構の一部が使用している。一昨年から建替計画が進められ、東京支店がテナントとして入居する予定となっていた。設計者は太陽設計でウエダの施工というフォーメーションでオーナー側に事業計画を提案した。最近内容が承認され、基本計画がスタートするタイミングであったが、バブル崩壊でオフィス賃料相場が急落したこともあり、支店長から大幅見直しの指令が飛んだのだった。

早速、設計部も参加して事業の見直しを行なった。賃料が6割に引き下げられることから、建築工事費も7割以下に縮小される。工事コストが急激に下がったとはいえ、厳しい目標である。鉄骨造18階建て超高層タイプの原案を、SRC造10階建てとして太陽設計に提案し交渉するという方針が決定された。太陽設計が了承すればオーナーの了承も得やすくなる。

太陽設計の責任者は、将来の社長候補と目される村絵設計部長である。意匠設計者としての実績とともに、プロジェクトマネジメント能力でも評判が高い。営業・設計・積算担当者がうち揃って設計変更交渉に出向いたものの、ウエダ側の意図を事前に察知した村絵は、ウエダが変更提案を切り出すタイミングを与えない。太陽設計原案のコスト縮減をするため設計変更検討することを提起し、具体策も提示した。結局、ウエダ側は10階建て変更案を提示する機会を失い、原案をベースに検討を進めることになった。

やはり設計界ダントツの太陽設計だ、凄い人材がいる。ウエダに付け入る隙を与えない村絵の進め方を見て、天野は激しい感動を覚えた。やはり上には

上がある、このような能力を身につけたい、これからは外に出て経験を積んでいこうと改めて意欲が湧いてくる。なお、後に村絵は、太陽設計トップへの道を捨てて村絵総合計画を立ち上げ、事業企画段階からの総合マネジメントによるプロジェクト成功事例を積み重ねて脚光を浴びることとなる。

【積算協会関東支部】

『BEAMS』7月号のメインテーマは積算のコンピュータソフトでいきましょうか。」

次第に日差しも強まってきた5月初旬、神田駅の近く、大手ゼネコン中林組本社会議室では、同社積算課長の稲村と準大手の曾田建設積算課長の吉本、そして天野が関東支部報の掲載記事について打ち合わせを行っていた。支部報『BEAMS』は積算協会関東支部の広報用の紙媒体であり、協会活動や積算関連の技術などの有益情報を提供し、協会と会員をつなぐ役割を果たすものだという。いわゆる季刊で、年に4回発行している。

新入りの支部役員となった天野は、広報委員会に所属することになった。広報委員会は、支部報『BEAMS』発行が主な仕事であり、委員長の稲村と吉本・天野で構成されている。

「ゼネコンの多くは自社のソフトを開発していますね。ただし、最近は数量積算の外注化が進み、積算事務所向けの市販ソフトのウエイトが大きくなってきています。一部の積算事務所では、自社開発しているようですが。」

吉本はコンピュータに詳しく積算ソフトの動向も把握しているようだ。

「一部の大手設計事務所は、むしろ概算プログラムの開発に力を入れているようですね。この辺りも扱いますか。」

稲村も全体の動きを掴んでいるようだ。

「今まで発行したページ数からみると、ある程度対象を絞り込むか、数回の連載形式をとる必要がありますね。」

天野は、今までは送られてきた支部報に目を通すこともなかった事実には蓋をし、ファイルに綴じられたバックナンバーをめぐりながら発言する。

「確かに、特集以外にも誌面を割かなければなら

ないですね。吉本さん、その他の掲載予定はどの程度でしょうか。」

稲村の問いに、

「ゴルフコンペ関東会の報告が1ページ、支部活動報告が2ページ、建築積算資格者の受験関係が1ページ、あとは随筆などで2ページですね。全体が14ページですから、特集は8ページとなります。」

吉村は淀みなく回答する。

「天野さんの言われる通り、それぞれ2ページ書いてもらうとしても4つになりますね。とりあえず、精算積算ソフトに絞って、2回に分けて取り上げましょうか。」

「そうですね、7月号はゼネコンで、10月号は市販ソフトでいかがでしょうか。」

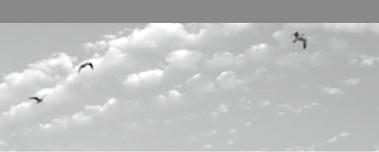
これだけ熱心に企画をして発行する支部報を、読まずに捨てていたなんて申し訳なかったな。それにしても、なぜ読まなかったか、読んでもらうための仕掛けが必要じゃないのか。天野は少し広報活動に興味を感じてきた。

「いやあ、天野さん久しぶりです。この度は関東支部にご参加いただきましてありがとうございます。よろしくお願ひします。」

興和建築事務所の渡上がお銚子を手に近づいてきた。

平成3(1991)年4月26日、関東支部定時総会が品川駅近くの会議場で開催された。活動報告・決算報告に続き役員選任が行われ、天野も正式の支部役員就任となった。新年度の計画が報告され、総会が無事終了した後、近くの居酒屋に場所を移し懇親会





が催された。出席者は役員と役員OBの約30名で、天野にとって大部分が初対面であった。

「それでは皆さん、新しく参加された方もおられますので自己紹介といきますか。まずは阿久津支部長からお願いします。」

進行役の花田副支部長が大声で発言する。話し声も止んで、阿久津が立ち上がり自己紹介を始める。阿久津は大手の一角である江東工務店に勤務している。その他に中堅の住玉建設の花田やマンション専門橋川工務店の新川などゼネコン勤務者は8名にのぼる。一方、設計事務所は、MTT設計など少数であり今後の組織的課題といえそうだ。

わずか数時間の懇親の席であったが、役員の個性を垣間見ることもできた。なかなか面白そうな人ものいそうで楽しみが増えたようだ。

昨年(平成2)年に建設大臣認定の建築積算資格者制度が開始され、無試験で経歴審査により準国家資格を取得できることから、今年4月には予想を大幅に超える約18,000人の資格者が誕生した。さらに、今年度まで無試験が継続されるため、同じ数の申請が見込まれるという。膨大な申請者の資格審査は関東支部が中心となって行うということで、10月から全体の準備を始め、11月から2か月で資格審査、2月に基本講習会を開催、3月に資格者登録証を発送するよう計画が進められていった。昨年は思いがけない数に遭遇して様々な混乱が生じたようで、今年はその経験を生かして準備が進められたようである。新人の天野は、11月からの資格審査要員となっている。

「内装工事についての積算経歴が記載されていますが、経験年数に入れられるのでしょうか。」

「認定要件では、積算の対象については“建築に関する”とされていて、特に対象を限定した規定はないですね。」

「それでは、内装などの専門工事の積算や設備についても経歴に含めてよいですか。」

「全て含めてよいでしょう。」

会議室に毎日5~6名が詰めて資格審査をしている。天野も、業務の合間を縫って審査に加わる。

2年間の無試験審査においては、積算実績に関し

て対象分野を特定せず、また専門の積算部門における業務にも限定しなかったため、様々な専門工事業や設備工事業あるいはゼネコンの現場管理者など幅広い分野の資格者が誕生した。このように積算専門分野以外の多くの資格者は、3年ごとの資格登録更新のたびに次々と脱落してゆき、その後の急激な資格者数減少にも繋がっていった。また、3年目に初めて本格的な認定試験が実施されたが、合格者は1,000名を割り込み、以降3年ごとの資格登録更新者数に年度間の大きな落差が生まれ、協会財政にも歪みを生じさせることになった。

【海外工事】

ウエダは、過去から海外工事への進出を積極的に進んでいたが、反面、リスク管理の欠如による撤退の歴史も積み重ねていた。中南米のODA工事は比較的安定した事業内容であったが、広がり欠けていたようだ。その後中近東へと進出したが、湾岸戦争でリスクが顕在化して撤退の憂き目にあっていた。最近では東南アジアを中心に中国へも進出を図っている。国際事業本部が工事全体を担当しているが、どうやら人材の不足が目立ってきたらしい。

「昨日社長に呼ばれたんだがね、海外工事は東京支店に任せたいと言われてな。」

平成4(1992)年の6月下旬、建築工事部門の幹部が支店長会議室に集められた。

「社長の構想では、現在のマレーシア・シンガポール以外に中国を重要なマーケットと捉えている。まあ、共産党が支配する国家ではあるが、ビジネスチャンスも無限ということらしい。あとはベトナムかな。こちら共産主義国家だが、今や近代化を目指して外資の導入にも積極的だし、ベトナム人の勤勉さはよく知られたことだ。」

皆は、呆然とした表情で聞いている。

「宮塚副支店長、現在マレーシアで2件、シンガポールで1件の工事が進行中だが、これも東京支店で引き継いで欲しいと言われているのだよ。」

「しかし、国際事業本部は消滅するのですか。」

工事担当副支店長の宮塚竜生は、東京支店のエースとして数々の大型工事や難工事の施工を担当してきており、酒好きな現場屋を自認している。一方、

工事部門に偏ることなく各部門の働きを公平に評価するところから、社内の人望も厚い親分タイプである。

「中南米のODA工事も継続しているので、それに限定して存続することになる。一番の問題は、工事関係者(これには設備や積算も含まれるが)の能力が不足しているため、品質や原価面でトラブルが続いていることのようなのだ。まあ、国際事業本部に転勤する職員を支店が厳選し過ぎてきたからかもしれないが。いずれにしても、東京支店の精鋭を海外に送るよう指示されたんだ。」

「しかし、現地の事情にも慣れず、英語もおぼつかない連中を送ったところで役に立ちますか。」

宮塚が歯に衣着せぬ発言をする。

「そりゃそうだが、英語教育も期間限定だし十分な準備も難しいが、東京支店の人材であれば現状よりも好転すると社長は考えているよ。宮塚さんの部下なら大丈夫だ、と笑っていたよ。」

「参りましたね。東京支店に事業部を作ることになるのでしょうか。」

「東京支店の総合力で対応して欲しいとのことでもあるし、特定の部門に集約するよりも、現在の各部門が連携して対応する方がうまくいくと思うのだが。この点は、皆で検討してもらいたい。」

「わかりました。差し当たっては、設備と積算だな。設計の出番は少なそうだし、調達作業所が中心とならざるを得ないだろう。さて、柳内くん、天野くん、どうだろうか。」

宮塚の問いに、

「設備は、積算と工事ですが、サブコンとの関わ

り方を含めて、地域の実情を調査しながら組み立ててみます。常駐も考えていきます。」

柳内設備部長が淀みなく答える。天野の大学先輩に当たる柳生暁史とは、常に連携して仕事に当たっている間柄である。

「積算も手探り状態から出発しますが、情報収集に努めて、地域の実情を反映したコスト管理を進めます。専任の担当も決めます。」

「いずれにしろ、一度現地を見てみよう。北方くん、工事部と設備部・積算部でマレーシアとシンガポールを視察する。現場もじっくりと見てみよう。工事部長は後程人選する。柳生くんと天野くんは、俺と一緒に、担当の課長も連れて参加してくれ。」

北方建築部長が視察の準備をすることになった。

【本部広報委員会】

各支部では支部報を発行するのだが、積算協会本部としても会誌『建設と積算』通称ケンセキを毎月発行している。担当は本部広報委員会で、理事の毛呂が広報委員長を務めている。関東支部役員となつて4年目に、天野は本部広報委員会への参加を打診された。関東支部の広報委員である吉本はすでに委員として参加しているそうである。

関東支部の活動は、資格者審査を除けば、初心者数量積算を教える積算学校や数量積算基準講習会であり、講師以外は事務補助的な役割を果たしていた。支部報『BEAMS』の記事についても、数量積算に関する技術や随筆的な内容が主となっており、天野としてはこれらの活動に物足りなさを感じていた。

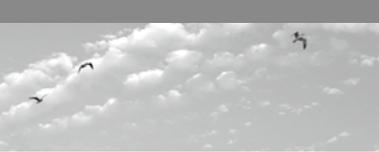
そこで、天野が実践しているコスト計画・管理について、ゼネコン・設計事務所・積算事務所に具体的な活動を執筆してもらおう企画を提案してみた。

「面白そうだね。やりましょう。」

稲村の言葉で特集企画がスタートした。

特集タイトルは、「コスト計画最前線」。ゼネコン3社、設計事務所3社、積算事務所1社に依頼し、通常より枚数も多少多くした。目新しい実践的な内容であり、それなりの反響があったようだ。毛呂がこれを読んで本部委員会に天野を呼んだのかもしれない。





平成6(1994)年8月、初めての本部広報委員会出席である。名簿によると、委員長と委員が4名、顧問と編集者の総勢7名で構成されている。委員長は打ち合わせ中ということで、初対面である顧問の淵神教授と編集者の中田そして2名の委員と名刺交換し、委員長を待つことにした。やがて定刻より15分ほど遅れて、毛呂委員長が入室した。

「やあ皆さん、遅くなって申し訳ありませんでした。実は先程、副会長と専務理事から広報委員長をクビにされました。まずは、このことを報告いたします。」

一同、狐につままれたような顔をしている。天野などは、初対面で名刺交換もしていないのだ。

「突然のことでいささか興奮ぎみでしたので、脈絡のない話をして申し訳ありませんでした。まずは順を追って説明します。」

毛呂の説明によると、今日突然、丸岡専務理事より電話があり、会議室に呼ばれたそうだ。そこで、同席した永野副会長と丸岡専務理事から広報委員長を辞任するよう求められたという。2年の任期を余すところ10か月での交代は異例であり、理由を尋ねたのだが、最近会誌の内容が停滞しており刷新を望む意見が多いことを挙げられた。しかし、本当の理由は、毛呂が現執行部(会長・副会長・専務理事)に対し、批判的な発言を行ったためだろうと考えている。どうも後任には、顧問の淵神教授を考えているようだ。

そのような話を聞いて、本日の委員会の議事が進むはずもない。

「すみません。新参加者が意見を申し上げますが、今日の委員会は終了して、場所を変えて一杯やりませんか。そこでもう少し詳しくお話を伺いたいのですが。」

天野の悪い癖は、すぐに出しゃばることだ。早速、居酒屋に席を移すこととなった。

毛呂陽一郎は中林組に勤務している。元々積算からスタートしてコンピュータシステムの開発に従事し、現在は営業部門に所属している。システム関係の世界ではレジェンドの一人であるらしい。アカデミックな雰囲気も漂わせているが、営業を担当しているだけあって商売人的な発言も飛び出してくるし、

マルチなキャラクターの印象だ。積算協会にもこんな人材がいたんだと、新しい発見をしたような嬉しさを感じる。

淵神哲明は、芝浜工業大学の教授で、谷川建設に在籍したこともあったという、学者臭さを感じさせない親近感を感じさせる人物だ。

そういえば先週のことを思い出した。建築本部の牧田常務から電話があり、採用面接で、積算部配属を希望した学生がいたとのことだった。成績優秀で入社できるだろう、俺も二重丸をつけておいた。2年間現場経験を積ませてから、積算部に配属する、といった内容だった。確か、芝浜工業大学の大学院生だったはずだ。

淵神先生に、このような一件がありましたと話すと、

「ああ、熊倉くんのことですね。彼は私の研究室の院生です。私の専門が建築生産で、コストに関する研究に力を入れていますので、彼の修士論文もコストに関するテーマです。それで積算に興味を持ったのでしょうか。」

「そうでしたか。通常はゼネコンに応募する場合は現場希望が多く、積算部への配属となると失望するような反応が多かったものですから。私自身もそうでしたし、何か軟弱者ではないかと心配していましたが、お話を伺って安心しました。大いに期待しています。」

一時は協会執行部批判の話で盛り上がりもしたが、やがて協会のビジョンや積算・コスト管理の未来へと話は発展した。天野は、毛呂と淵神との会話で得ることも多かった。この日の3人の出会いが未来の絆を作ることになる。

9月から本部広報委員会が再開された。結局、淵神の委員長就任は実現せず、永野副会長が委員長代行を務めることになった。天野は、この頃でも会誌をほとんど読んでいなかった。技術的に参考になる記事が少なく、論文や物価版などからの安易な引用が多い誌面であり、実務者として魅力を感じなかったことによる。しかし、このままでは会員サービスが実現しないことは永野をはじめとして委員会メンバー全員が感じていることでもあった。

「一つ提案があるのですが。会誌の企画をレベルアップするためにはどうしたらよいか、根本的に考える必要があると思うのですが。また、広報委員会は、会誌編集だけではなく対外的な広報など幅広く役割を考えるべきだと思います。このような会議の時間で考えてもまとまらないと思いますので、思い切って一晩合宿して議論しませんか。」

否決される可能性が高いと考えていた提案であったが、あっけなく可決されてしまった。11月開催で準備に入る。金曜日の終日と土曜日の午前中を使い、新宿の厚生年金会館別室を確保した。永野を始め参加者は熱心に討議に参加し、広報委員会の役割や会誌の目指すべき内容やレベルについて、一定の整理がなされたのだった。

とりあえず、自分の役割は果たせたとほっと一息ついた12月初め、永野から電話があった。

「天野さん、色々ありがとうございました。おかげで広報委員会の方向性も出ましたが、今後についての相談がありますので、そちらにお伺いしたいのですが。」

永野から思いがけない広報委員長就任要請であった。天野は、これだけ整理できたからには、当然淵神が就任するだろうと考えていたのだが、来年の本部定時総会において理事に就任し、6月から広報委員長として活動を開始して欲しいとの依頼である。

「永野さん、私は淵神先生が適任だと思います。そう思いませんか。」

「実は、淵神先生に相談したのですが、天野さんが最適任だと強くおっしゃるのです。淵神先生にも理事就任をお願いしていますが、広報委員長はなんとか天野さんにお引き受けいただきたいと考えています。」

「私には荷が重すぎます。淵神先生と話してみますよ。」

「そうですね。しばらくお待ちしますので、ご検討をよろしくお願いいたします。」

「それでは、お時間をしばらくください。先生を



なんとか説得してみます。」

数日後、天野は、日本酒と虎屋の羊羹を手に、芝浜工業大学の淵神研究室を訪れた。

「先生、私は委員としてしっかり支えますので、ぜひ委員長をお引き受けください。私が委員長などとは考えられません。」

「天野さん、先日の合宿でのリーダーシップといい、あなたの新しい考えと行動力が広報委員会に必要です。私がバックアップしますので、ぜひ委員長を引き受けてください。積算協会のために必要なことなのです。」

話は平行線をたどり、天野が持参した一升瓶を飲み干す頃には、反論するネタも気力も失せていた。もはや、退路は絶たれたという心境で研究室を後にする。

次号に続く

この物語はフィクションであり、登場する機関・企業・団体・個人は実在のものではありません。

PCM (Project Cost Management) シリーズ3部作は、積算協会ホームページに掲載されています。